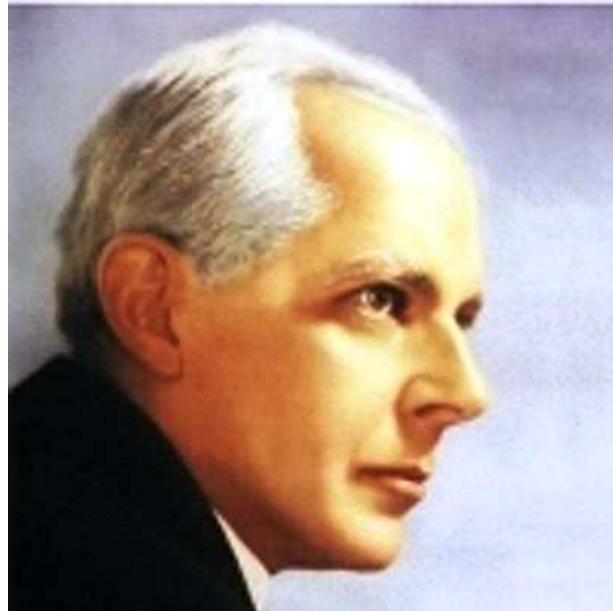


バルトーク と ドン・キホーテ

2022/03/21



Bartók Béla 1881-1945

私は、「20世紀を代表する音楽作品は、バルトークの『オーケストラのための協奏曲』とショスタコーヴィチの『弦楽四重奏曲第3番へ長調作品73』だ」と思っています。

友情の献金

バルトークの「オーケストラのための協奏曲」は、バルトークが、亡命先のアメリカで貧困と宿痼(しゅくあ:白血病でした)のために苦しんでいる現状を見るに見かねた音楽仲間たちが、お金を出し合い、ボストン交響楽団の音楽監督だったクーセヴィツキーが代表して出かけて行って、お情けを嫌がる彼に、「私の音楽監督就任20周年を記念する作品として」とか、「亡くなったナターリヤ夫人の追憶のための作品として」とか、夫人と共に設立した現代音楽の普及を目的とした「クーセヴィツキー財団からの委嘱として」とか、あれこれいって、無理矢理、書かせた作品です。アメリカに渡って初めての作曲依頼でした。あくまでも固辞する彼に、クーセヴィツキーが、「期限は設けない。好きなときに書き始めていい」といって作曲料の半分に当たる500ドルの小切手を病気で寝ている彼の枕元に置きました。だれも、病み衰えて病床に着いているバルトークに、このような大作をまとめる力はもうないだろうと感じていました。

ところが、バルトークは、信じられないほどの早さで作品を仕上げました。総譜のバルトーク自身の書き込みによれば、依頼を受けた1943年の8月15日に作曲を始め、10月8日には完成しました。初演は、完成の翌年の1944年12月1日にボストン交響楽団の演奏会でクーセヴィツキの指揮で行われました。大成功でした。

おまけで50年

この初演から戻ってきたバルトークは、友人の一人に言いました — 「クーセヴィツキーが、リハーサルの際に、過去25年間を通じての最高傑作だといって誉めてくれたんだが、今度は、もう25年おまけして、過去50年間を通じての最高傑作だというんだよ」。そして、「あれ以上の立派な演奏を望むことは、どんな作曲家にもできないことだろう」と感慨深げにいいました。

おかげで、バルトークは、経済的にも持ち直し、精神的にも充実した日々を送ることができました。「作曲依頼」にかかわった友人の音楽仲間たちも、喜びました。その中には、同じハンガリー人で、バルトークがハンガリーから亡命するのを助けたフリッツ・ライナーやヨーゼフ・シゲティもいました。バルトークは、その一年後の1945年に亡くなります。

彼は、この「オーケストラのための協奏曲」に取りかかる前に、セルバンテスの『ドン・キホーテ』を熱心に読んでいたということです。なんだか、暗示的です。バルトークは、痩せて、貧乏で、ツルゲーネフの言う「世界で最も倫理的な人物で理想の奉仕者」で、放浪の旅をつづける正義の騎士ドン・キホーテに救いを求めたのでしょうか。

それもあって、ホームページのエッセイに、『ドン・キホーテ』のことを書きました。 [この項は、昔からの私の愛読書、志鳥栄八郎さんの『名曲ものがたり』\(上\)を参考にさせていただきました。](#)

あとは沈黙 ショスタコーヴィチの「弦楽四重奏曲第3番」



Dmitrii Dmitrievich Shostakovich, 1906- 1975

ショスタコーヴィチの「弦楽四重奏曲第3番」は、冗談音楽の最高傑作です。全5楽章です。

第1楽章では、4人の酔っ払いがそれぞれに管(くだ)を巻いてガヤガヤ・ワイワイ騒ぎ合っているのです。いつまで経っても終わりません。なにか余程、腹に据えかねたことがあったのでしょうか。書く方も書いたもので、よくもまあ、こんな混乱で、狂乱で、八方破れのハチャメチャな音楽が書けたものです。アレグレットですが、当然、とても速く、イン・テンポで、アレグロ・コンブリオで、カー杯奏いてもらいたいものです。第2楽章になると、少し小声になって、酔いの勢いは少し納まったのですが、まだまだ、それぞれがザワザワ・ネチャネチャ同じ言葉を繰り返しながら「オスティナート」で文句を言っています。第3楽章では、遂に酔っばらいたちは、汚く汚れて草臥れた古い軍靴を踏みならしながらドンドコドン・ドコドンと踊り出します。2拍子と3拍子で交互に書かれた変拍子で、やっぱり、酔っ払いです。例のチャイコフスキーの「悲愴交響曲」の5拍子の第2楽章、"Allegro con grazia"（優美に快速に）のパロディです。踊りながらもまだ、ブツブツ・グチャグチャ言っています。第4楽章は古典的な「パッサカリア」です。アダージオです。ついに、疲れて静かに寝てしまいました。でも、まだ寝言でムニャムニャ・フガフガ言っています。終楽章の第5楽章は、酔いが醒めて現実に目覚めたのか、悟ったように、少し真つ当なことを言い始めました。でも、また、ハッと気がついたのか、「言いたいことは、言えないのだ」と思いました。そして、「シーッ、シーッ、シーッ」と唇に三度、指を当てたピッチカートでお仕舞い。

ショスタコーヴィチが、この「第3番」の弦楽四重奏曲を書いたのは、第2次世界大戦終結から1年後の1946年でした。その前年に書いた「交響曲第9番」が、ベートーヴェンの「第九交響曲」のように、勇壮で、華々しい「勝利の交響曲」として国中がこぞって期待したものの、滑稽で、邪悪で、悪意に満ちたものが感じられて、「スターリンを揶揄(やゆ)するものだ」という当局からの批判も相次ぎ、最後には、厳しい「ジダーノフ批判」を受けました。終楽章ではユダヤの民謡旋律がパロディとして含まれていることから、ユダヤ人の解放を意図したものだとおもわれたりもしました。そのあとに、この「弦楽四重奏曲第3番」がきます。これは、お咎(とが)めなし。

演奏は、[youtube](#) でお聞き下さい。若い4人のドーヴァー弦楽四重奏団が奏いています。上手いです。

都築正道